

て、その十月二十八日パリで永眠したとのことであります。以上は前述のペリエ氏の追悼の辭に基づいて私の知るところを付け加へ、極めて簡単にその経歴を述べたのであります。

その著述は非常に多くてこゝに一々枚舉することは困難でありますが、一九二七年までの重なる述作が一九三四年の *Bibliographie Buddhique* の第四—五號に約百種ほど載せてあります。その後雑誌通報・亞細亞學會雜誌・極東學院紀要等を始め、内外の東方學術雜誌に載せられたものが多數ありますが、その主要のものは大概今日別室に陳列して置きましたから御覽を願ひます。一九二七年から一九三一・二年頃にかけて驚くべき勢で論述を發表して居ります。たゞ今次の戦争始まつて以後のものは今なほ知る便宜がありません。これを通觀致しますと著書と名づくべきものは殆んどなく、僅に圖録の *les Grottes des Touen-houang* 六冊とゴーチオとの共著ソグド語の *le Sūtra des causes et des effets du bien et du mal* (善惡因果經) の譯述とが「中亞に於けるミッション・ペリオ」の一部として出刊されてあるのと、ムール氏との共著の *Marco Polo, the Description of the World* の第三冊にマルコ・ポロの見聞録の註解を施したものが出る豫定になつて居る——もう既に出てゐるのかとも思ふが自分はまだ見てゐない——位のもので、外には格別まとまつた著書はなく殆んどすべてが専門の學術雜誌の類に載せた論文であります。但しこれらの論文の中にはずいぶん長篇で、優に書物の體裁を整へ得るものも少くはありませぬ。例へば一九一一年及び一九一三年の亞細亞學會雜誌に載せたシャヴンヌ氏との共著 *un traité manichéen retrouvé en Chine* の如き、また一九二〇年に通報誌上に發表した牟子理惑論の研究の如きはそれでありませぬ。その學風について少しく述べて見ませう。一體フランスに於ける中國を中心とした東方學の研究は、他の歐洲諸